

埼玉岳連

発行所 埼玉県山岳連盟

埼玉県東松山市松葉町2-15-8

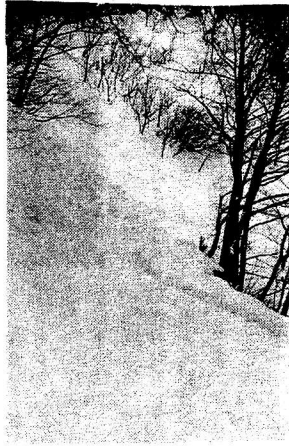
発行人 清水武甲

編集人 花輪滋実

第4号(1)

自然に入って行こう

大沢 亮一



谷川岳旧道

世の中がようやく我々の心がわかってきたようである。自然が如何に大切であるかというのを。我々は自然を愛し自然の中に生きてきた。山男は自然に育てられて力強く成長してゆくものである。それでは我々にとって自然とは何であらうか。

それは登山のあり方を考えさすいろいろな姿の山と、ここに生きたる動植物、灼熱の太陽、肌をさす谷川の水、希薄な空気、岩の感触、垂直の水壁、神々の座をつくる雪、そして高度に順応した人間である。こうした崇高な自然の中に点のような存在であっても山男は幸福といわざるを得ない。偉大なる大自然の中の行動、そこにはスポーツも文学技術、これ一つにも限らない

程あることはご存知のとおりである。気象にしても、日本はもとより、世界中を知らなければならず、食糧のこと、装備のこと、用具、医学も常識程度は必要、通信、語学、等々山岳に限らずあるが、何分にもアマチュア登山家の集りである我々としても最少必要なことは知るように心がけたいものである。技術的な問題も知識以上に基本的なことを身につけることが大切で、これは本能的又は修練して第二の本能とするまで鍛えあげなければならぬ。

登山は、その山の最も良い季節に、最も安全なルートに登って、そしておりてきて一つの登山が終わるが、ヒマラヤをはじめ世界の高山は別として日本では冬山とか、春山とか、ある状況をつくって、更に難しいルートを選んで行動しなければならぬ所に無理がある。私自身足まで折り、尚それさえ悔いなくて登っていったことを思えば若い岳人がひたむきに登る心はわかりすぎるがアウトは一回きりないのが登山であるからこの点よく考えなければならぬ。

真剣勝負の心境と同じに、岩場につまづいた時、高度感も恐怖心もなく、無我の境になつた時だけ難場を越すことが出来た。それは如何なるとこ

ろにも必ず生きた道があることを悟り、その後の人生観として如何なる困難も必ず越すことが出来ると信じてきたが、こんなことを皆さんに話すことも心苦しく、強いことも出来ない。それにしてもエベレスト南壁の計画が発表されたが、その成功は登山技術のあらゆるものを発揮しなければならぬまいが、月の山なら兎も角、生きている山へ登るのであるからその成功は科学的で理論的に計画通りにはこんでくれるアポロ計画よりもむづかしいことであらう。

近代スポーツ登山をより発展させる為、協力していかなければならぬが、もう一度ふりかえってみたいものがある。

最もすばらしい献立による食事よりも、いかなるものでも食える身体が行動力の基であり、空気の味がわかり、ただの水がうまいと感じる自然の中の人間として生きてみたいものである。

雪の中に起きて、ぶるぶる雪をふりはらって、ただそれだけで黙々とあるいて行くかもしかの姿は自然の姿そのままである。

埼玉県山岳連盟副会長

HOMとDAM

近年、海外の山岳を求めて渡航する人達が激増しているが、私達もその例にもれず昨夏、ヨーロッパへ出かけた。その時私達が一番痛切に感じたマナーについて一筆してみたい。これはシャモニのプラのキャンプ場の事であるが、私達がモンブラン山群を登攀する為ここをテントを張って、一週間程経った頃、日本の或る有名なクラブの人達が男女合せて五〇名近くも入場して来たことがあった。

その翌朝、私が男子用のトイレに行くとき、満員らしいのでその前で開くのを待っていると、なんとそこから日本の女性が平気な顔で出てきたのである。後でわかった事であるが、その女性は、昨日入場して来たそのクラブの女性グループのリーダーらしかった。トイレの入口には、大きな赤い文字で、HOM、DAMと、ちゃんと書いてあるのが見えなかったのかも知れないが、それにしても不注意と言わざるを得ない。又或る日、同じキャンプ場でトランジスターラジオ売ります、という看板を洗面所に貼っていたグ(二頁へつづく)

積雪期登山技術講習会

埼玉県教育委員会、埼玉県山岳連盟主催による、「積雪期登山技術講習会」並びに研修会が、去る二月十五日より十八日までの四日間に行われ、山梨県の富士山五合目附近で、野井篤、三浦一郎、加藤長市郎、西村捷夫、斎藤誠、北千恵吉、井古田忠男等の指導員諸氏を講師に開催いたしました。

参加者も県下高等学校山岳

部顧問の教諭、あるいは県岳連所属山岳会員多数にのぼり、大いに賑わいました。

今回の主な内容は講習会参加者は初心者ということから、冬山登山技術の基礎に重点を置いて、日山協の指導教程に倣って、三日間充分時間をかけて実施しました。

研修会参加者はすでに冬山登山技術はマスターした各会員のリーダー又はそれと同等以

上の資格ある者という参加基準がありましたので、本年は遭難事故発生時の救助技術に重点を置いて、又、積雪期登山技術の指導方法についても研究討論致しました。

なお最終日の二月十八日には、午前八時より、同会場にて、地区指導員ならびに、二種指導員の検定会を実施しました。

検定方法は、(一)実技、(二)ペーパーテスト、(三)総合判定の三科目に分けて行いました。(一)の実技については、(イ)アイゼンなしの歩行、(ロ)アイゼン



山スキー講習はじまる

雪洞技術講習会

埼玉県教育委員会、埼玉県山岳連盟主催により、雪洞技術講習会を会場を新潟県土樽スキー場附近にして、四十数名の参加者を得て三月三日(土)四日(日)の両日実施しました。

土曜日は小雪が舞い、一夜明けると快晴という、絶好のコンディションのもとに無事終了しました。

講習会は雪洞を掘るのは始めてという参加者ですので、雪洞の掘り方について、更に、雪洞中の生活技術について

第一日目に講習し、第二日目は輪かんをつけたのラッセルテクニックとスノーポートを使ったの搬出技術を勉強しました。研修会参加者は第一日目にイグルーの作り方を研究し、第二日目は、スキーを応用しての「ソリ」の作り方とその搬出方法を研究討論した

いる必要があるものを出しました。

(三)の総合判定は、年間を通じての岳連行事に出席した時のものを参考に、以上の成績を、来る四月の指導員会に提出して、選考いたします。

後、ラッセルテクニックとラッセルワークについて指導方法を学びました。

そして、今年始めて、山スキーをテストケースとして取り入れてみました。今後、積雪期の登山にスキーのよさが再確認され、多くの人が取り入れる傾向のようですので四十八年度からは積極的に取り組んでいきたいと思えます。来年も多数の参加を希望いたします。

(写真上は富士山での滑落停止訓練、下は土樽附近にて救助訓練)

お知らせ

編集部では皆さんの寄稿を待っています。左記へお寄せください。

東松山市松葉町二十五ー八
加藤長市郎
熊谷市中奈良一八九六一五
花輪滋実

ループを支配人が見つけて、さんざんとなっていた事もあった。又或る時、シャモニの街頭のお巡りさんが、いやがっているのを無理矢理写真を撮って得意がっていた日本女性もあった。日本人旅行者の旅の恥はカキ捨て的な、自己中心的な性格、それをいやと云う程見せつけられた様な気がした。こちらからすれば、ささいな事かも知れない。しかし、その軽率な行動が、向うの人の感情をどれ程傷つけるか知れないのだ。フランスなどは、特にブライドの高地に於ては、又登山の領域に於ては特にそうである。抜けるハークンをベタ打ちのまま残して来たり、無人のヒュッテを無断で使用して平気で帰って来るなど、とてもない事だ。ともかく、今後海外に遠征される人も多いと思うが、その次に行く人の事も良く考えて、決してその人達が、白い目で見られたり、馬鹿にされたりする事のない様に、最低のマナーと、広い意味での人間性とか、国際性を準備して出かけてもらいたいものだ。

(熊谷地区 岩元美都男)

白井差小屋

小川 地区

事務所 比企郡小川町小川一、
〇三一 久保征一方
所属団体
小川山の会 二五名
方針と活動
小川町体育協会山岳部とし

て、年間数万円の助成金を受け毎年春と秋に町民ハイキングを実施して、会員と一般町民との山に対する理解を深め、会員募集にも一役買っている。会のモットーは、誰でも楽しく、事故のない安全な登山ができるように心掛けています。事故について
では、教育委員会に關係した団体である
為、特に気を使っている。合宿はそれぞれ仕事が違うため正月位しか多数参加できないが、今年は七名参加で赤石岳に登ってきた。最近では若い優秀な人が多く入会したので、この小川地区で、もっとたくさんの人達が本當の意味での登山を愛好する様努力して行きたいと思っている。県岳連諸兄のご指導をお願いします。



山 岳 連 盟

地区 岳連 横顔 (2)

すが、徐々に活発な動きを見せ始めました。もっぱら県岳連と山岳会の間の連絡を密にするよう努めており、地元との体協とも連絡を今まで以上に深めております。

熊谷 地区

事務所 熊谷市熊谷八一〇赤城
城家内岩元美都男方
所属団体
熊谷山岳会 一七名
壁根山岳会 二五名
アルム山岳会 三七名
熊谷岳友会 一八名
熊谷山旅会 二一名

事務所 東松山市松葉町二一
一五一八
加藤長市郎方
所属団体
東松山岳会 一七名
壁根山岳会 二五名
アルム山岳会 三七名
熊谷岳友会 一八名
熊谷山旅会 二一名

事務局 便り

三月。理事会

〇雪洞技術講習会
各地区岳連で机上講習会を開催する希望がありましたら、岳連事務局まで申し出下さい。講師の派遣並びに経費の一部補助を致します。

(一) 理事会報告
過日、理事会を開催し、昭和四十八年度の事業計画案の検討をいたしました。期日、会場、議題は以下の通りです。
一、期日 昭和四十八年二月四日、午前一〇時より
二、会場 東松山市公民館
一、議題
(一) 積雪期登山技術講習会について。実施要領の説明、並びに各地区より参加者を推せんくださるよう依頼。
(二) 雪洞技術講習会について。実施要領を至急各地区へ流すことを決定。
(三) 昭和四十八年度事業計画案の原案審議。原案の概略は次の通りです。
四月。総会。指導委員会
五月。理事会。机上講習会
六月。机上講習会
七月。理事会
八月。沢登り技術講習会
九月。理事会
十月。県民体育大会登山大会
十一月。理事会
十二月。連対組織の訓練
一、理事会。連対中央研究協議会
二、積雪期登山技術講習会。海外登山研究協議会

(二) 机上講習会について。
各地区岳連で机上講習会を開催する希望がありましたら、岳連事務局まで申し出下さい。講師の派遣並びに経費の一部補助を致します。

(三) 所属団体の報告について
各地区岳連の所属団体を必ず、ご報告下さい。近日中に報告用紙をお送りします。この報告をもとに日本山岳協会へ登録します。

(四) 紫藤理事元氣に退院、
昨年十二月毛呂山町の毛呂病院にて、脳腫瘍の手術を行いました。紫藤明さんも本年一月元氣に退院することが出来ました。四月頃からの理事会には又皆様と共に岳連の運営に仲間入りすることが出来ると思います。皆様方の心からの激励に深く感謝しております。

〇「岩を傷つけずに登れたことがうれし」と、昭和六年に穂高屏風岩の第一ルンゼの初登攀に成功した小川登喜男氏の言葉である。
〇現在スーパールビニズムが優先し、もはやこの言葉など無意味な過去のものではかありえないだろう。が筆者に

編集室

は脳裡から焼きついてはならないこの言葉の真髄はロッククライミングのすべてであり、大きく言うならば登山そのものにもあてはまるような気がする。
〇これもまた先人の言葉であるが「第二登以後の登攀はもはやアルビニズムに値しない。ましてや人工登攀においては、極端に言えばアプミの掛換え作業でしかない」と。
〇我々は情報・物資の氾濫する世の中で刻々変化する登山界に、ついてゆかなければならないから、とうぜん思考よりも物質の方が、先に進んでしまいが、それらにおぼれずに歩まなくては行けないのかもしれない。先人の言葉や行動を過去の遺物とはせず、振り返り考える余裕があつてほしいものだ。
〇たまたま田中氏と岩元氏がマナーとモラルについてのべているが、少なからず身に覚えのあることであろう。登山界の底辺が広がり、多くの人が山をめざすこの頃である。人口が増えて、必然的に質の低下がおこっているとしたら、我々は何をなすべきなのだろう。スポーツ登山を愛する者にとつて、やきもちづいてものだらう。このことについても考えてもらいたいような気がする。